

民主主義の学校フォルケホイスコーレ

氏名：加藤芽依

活動場所：デンマーク

－ フォルケホイスコーレとは

北欧地域で普及している独自の教育期間。19世紀前半にデンマークで創設者のグルントヴィが「すべての人に教育を」と唱え、当時十分な教育が受けられなかった農民を対象に広がった。試験や成績がなく、授業は生徒中心の対話型で進められる。学校は私立学校に当てはまるものの、国の税金によって運営されている。アート、スポーツ、アウトドア、哲学などの授業が一般的だが、各学校によって特化した授業やコンセプト、カリキュラムや学風は大きく異なる。

－ Vestjyllands Højskole の特徴

わたしが通っていた Vestjyllands Højskole はデンマークの西部の Rinkobing という小さな町に位置する。サステナブルで自然と調和した暮らしを通じた社会や政治への実践的なアプローチをコンセプトに置いている。学期は春と秋の4-5か月ずつ。学期ごとに生徒を募り、先生や授業ががらりと変わることもある。授業は market Garden、permaculture など農系、textile craft, wood craft などクラフト系、natural building や food preservation など自給のための技術系、contemporary dance, music などクリエイティブ系、meet the world など政治系など多種多様な授業を自分自身で時間割に沿って組み込めるようになっている。また共同生活はフォルケホイスコーレに共通するひとつの特徴といえる。そのため、寮で過ごす時間が多く、食事は一日三食揃って食べる。学校運営においてもコンセプトに沿った独自の取り組みとして食事やエネルギー、モノの循環などが挙げられる。学校の食堂は学校内の畑もしくは地域で採れた食材でその多くは農薬と化学肥料が使われていない方法で作られている。また週ごとのメニューサイクルやレシピによりフードロスをもっと最小限にするための工夫が実践されている。エネルギーに関しては、学校内に併設している風車や太陽光パネルで自家発電を行っている。

さらには学校に関わる人々がコンセプトに共感し、アイデアを日常的に共有することで、より持続可能なやり方を追求しているのも学校の取り組みの土台となっている。

- 一日のスケジュール

平日は朝食後を食堂でとった後、Morning Assembly と呼ばれる集会に参加することになっている。集会の中では Song book と呼ばれるデンマーク語の英語の民謡、ポップソングなどが入った分厚い歌詞ノートを一冊片手に持ち、一日 2, 3 曲合唱する。その後、授業の先生や学校で働くスタッフ、有志の学生によるプレゼンテーションを聞き合う。講義形式の場合もあれば、対話、実践を伴ったワークショップ形式の場合もある。

そのあと午前の授業、昼食を挟んで午後の授業を行う。授業時間のほとんどを先生の講義を聞いて椅子に座って過ごすということはほとんどない。天気がいい日は外に出て、紅茶やコーヒーをいれたカップを片手に各々がリラックスした状態で過ごす。そのまま庭や畑で見つけた自然物にインスピレーションを受けて創作物を作る場合も多い。自分の身の回りにあるものを自分の視点で解釈し、言葉やモノとして再生する。授業以外の時間は学生主体で作った委員会やクラブなどのイベントがほぼ毎日起こる。一日の時間をどのように過ごすか考え、試す。日常を自ら創り出していく主体性や想像力、そして他者との協働性を育てていくことは社会というより大きな枠組みにおいて基盤となる「民主主義」となるのだろう。

- 個人の活動

埼玉県 PR

他の日本人学生とともに「Japanese weekend」という数日間に渡るイベントを企画した際、特に埼玉を PR する機会が多くあった。夕食の際には「狭山茶」を特別に用意した日本食のメニューとともに振舞った。ほかの日本茶との違いや特有の魅力を紹介した。また埼玉県出身、在住者として私自身の個人的な体験を通して町の様子や景色、特産品などを積極的に共有した。所沢市が舞台となる「となりのトトロ」を上映した際は学生たちは映像内の美しい日本の原風景に感動していた様子が見られた。

日本のジェンダー問題に関する発表

フォルケホイスコーレでの滞在においてデンマーク人のジェンダーに対するカルチャーが自分が持っているものと大きく異なると衝撃を受けた。きっかけにして自分自身が育った女性として日本のジェンダーを捉え直してみようと考え、まとめたものを他の学生たちに

Morning Assembly 内のプレゼンテーションで共有した。「沖縄の米軍基地における性暴力事

件)、「政治分野のジェンダー格差」、「避妊と中絶」などと事前に学生たちと話していたいくつかのトピックを中心に選び、日本においてジェンダーという観点からどのような課題があるのか、これまでの市民主体でどのように改善へと働きかけてきたのかなどを日本の「民主主義」、「ジェンダー観」を土台に紹介した。デンマークとは大きく異なる日本の社会状況を伝え、学生たちから質疑等がいくつか挙がった。発表後の意見交換の時間も含めて充実した時間となった。

フォルケホイスコーレ後のボランティア/インターンシップ活動

2024年12月に参加していた秋タームの授業がすべて終了し、1,2か月ごとに異なる農場やコミュニティスペースで滞在をしながらボランティア/インターンシップ活動を行った。フォルケホイスコーレでは理論を学び、自分で理解するために他者ともに試行錯誤する時間が中心だったが、卒業後の活動では場所や団体ですでに実践している姿を近くで学ぶことができた。通っていたフォルケホイスコーレとも繋がりのあるコペンハーゲン近くのコミュニティファーム、デンマークで一番初めにできたエコヴィレッジ、離島で再生型農業を実践しているCSAファームそしてデンマークを出て南フランスに位置する協働型のファーム、パレスチナのコミュニティファーム、インドのシードバンクなど文化や気候、環境が異なる地域で再生型農業がどのように実践されているか、そしてファームが地域のコミュニティづくり、そして地域で市民主体の政治参画にどのように機能しているのかを現場でともに時間を過ごしながら学んだ。

デンマークでは政府が中心となりオーガニック認証のついたブランドの普及や学校や病院、老人ホームなど公共施設におけるオーガニック食材使用の普及を行っているため、オーガニック食材の卸先が確保されており、農家に対する補助金制度も充実しているとのことだった。また、教育目的のワークショップやツアー、などの活動も給付金の制度があり、生産以外の畑で開く外部向けの活動も取り組みやすいと聞いた。離島の島ではファームで働くメンバーを中心に島内で新規で有機農家に就農する人々を支援するためにボランティアで財団を設立し、募った寄付金で耕作放棄地を買収し、補助金を給付するプロジェクトを推進している人々にも出会った。私自身が以前訪問した小川町が行っている有機農業を推進する取り組みを滞在先の人々にもシェアした。地域全体で消費者と生産者の関係性づくりに取り組む姿勢には重なるものがあると思った。



farming



folke



Japanese weekend